史跡・今城塚古墳

―― 平成13年度・第５次規模確認調査 ――

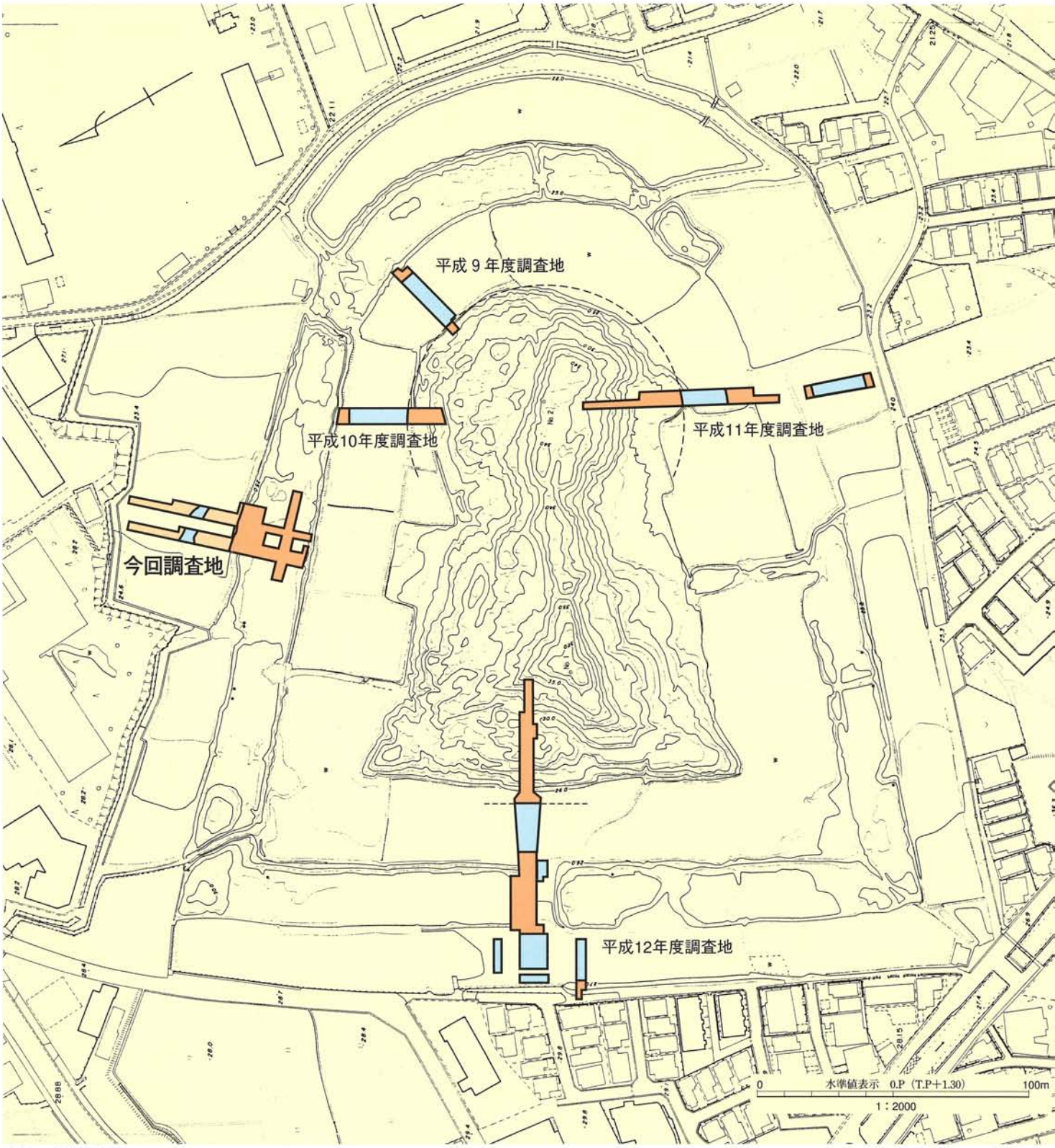
2002

高槻市教育委員会

はじめに

今城塚古墳（いましろづかこふん）は６世紀前半に築かれた全長190ｍの前方後円墳です。前方部が開いた墳丘の周囲には二重の濠と堤が巡り、総長は350ｍをはかります。これまでの調査では、墳丘と内濠・外濠などの規模や形状が判明し、内堤や内濠からは円筒埴輪や３種類の家形石棺片などがみつかっています。また、「今城」という名の由来どおり戦国時代に墳丘や濠を利用した城砦による改変や大地震による墳丘崩壊の状況も明らかになりました。

今回の第５次調査は、古墳北側の内堤から外濠にかけての形状や遺存状況を把握するため、北側内堤中央部を調査しました。



表紙　人物埴輪群

調査位置図

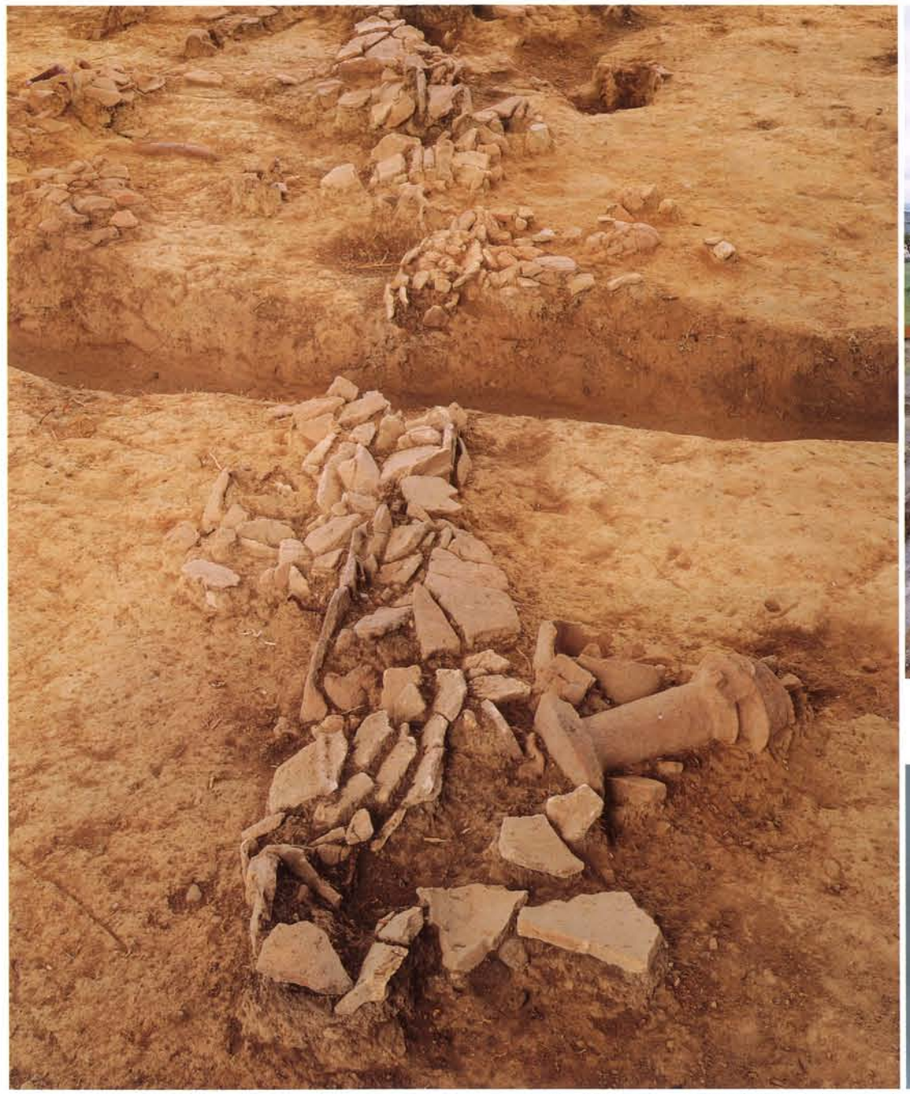
内　堤

古墳の周囲を一巡する内堤の大部分は上面幅が18ｍ前後でほぼ一定ですが、今回の調査区では全体が北側へ張り出していることを確認しました。北縁部は一様に崩落していますが、現存する上面幅は約24ｍであり、張出した部位の南北幅は６ｍを越えます。本来の内堤部分は小石混じりの土などを用いているのに対し、この「張出（はりだし）」は上面が均質な砂質土で覆われ、南から北へ向かってゆるやかに下降しています。外濠部裾からの高さは約３ｍを測ります。上面では円筒埴輪列と形象埴輪群及び溝２条などがみつかりました。

円筒埴輪列は内堤の南北の両側部に沿って各一列あり、両者は14.7ｍの間隔をもって平行に並んでいました。すべて円筒埴輪によって構成されますが、いずれも底部付近のみ現存し、体部は破損・散逸していました。円筒の規模は底部径35cm前後を中心に数種類あり、墳丘側（南側）埴輪列に小ぶりのものを多用していました。また、埋める深さが一定でなく、周囲や底に小石等を据えているものなど、埴輪列の高さや傾きを整えるための工夫がうかがえます。

このほか、内堤上面では中世以降とみられる２条の溝がみつかっています。溝１は内堤に直交するよう調査区中央付近を南北にのび、南側では西へ屈曲するようです。円筒埴輪等を切り込んで掘削しているため、東に盛った排土には多量の埴輪が含まれていました。幅1.5～1.8ｍ、深さ0.3～0.4ｍをはかります。溝２は内堤北側上面を東西にのび、溝１を切っています。幅0.4～0.8ｍ、現状の深さは約60cmを測ります。溝内には埴輪が落ち込んでいました。

内堤と埴輪祭祀区（北東側から）



柵形埴輪・大刀形埴輪の検出状況（南側から）

埴輪祭祀区　全景（西側から）

杯を捧げる巫女形埴輪１（頭部復原）高さ約100cm

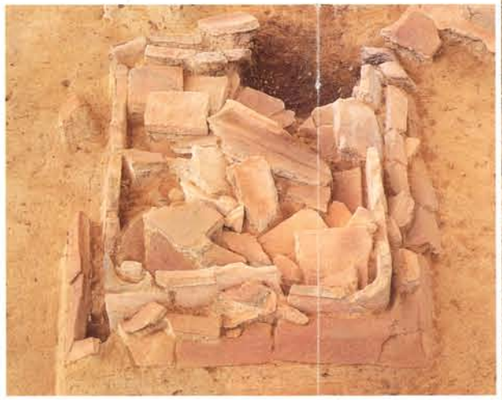
棒状具を掲げる巫女形埴輪２（頭部・基台部復原）高さ約100cm

大刀形埴輪（束部分）現存長約50cm

人物埴輪群（東側から）

柵形埴輪・門形埴輪（右端・復原高約43cm）

直弧文で飾った家形埴輪の検出状況（西側から）



埴輪祭祀区

北側円筒埴輪列のさらに外側の張出部で東西20ｍ、南北６ｍの範囲から多種多様な形象埴輪からなる埴輪祭祀区を検出しました。種類としては、家12点・柵（囲い）13点・門２点・器財＜蓋２点・大刀10点・盾１点・靫１点＞、人物＜武人２点・鷹匠１点・力士２点・巫女７点・座る男子４点＞、動物＜馬２点・四足動物７点・鶏４点・水鳥11点＞などがあり、形態不明のものを含めれば100点を越える埴輪がみつかっています。これらは南側（墳丘側）に水鳥や大刀が列をなし、その外側（外濠側）に家・人物・動物などが一定のまとまりをもちながら、東西方向に展開し、配置されていました。

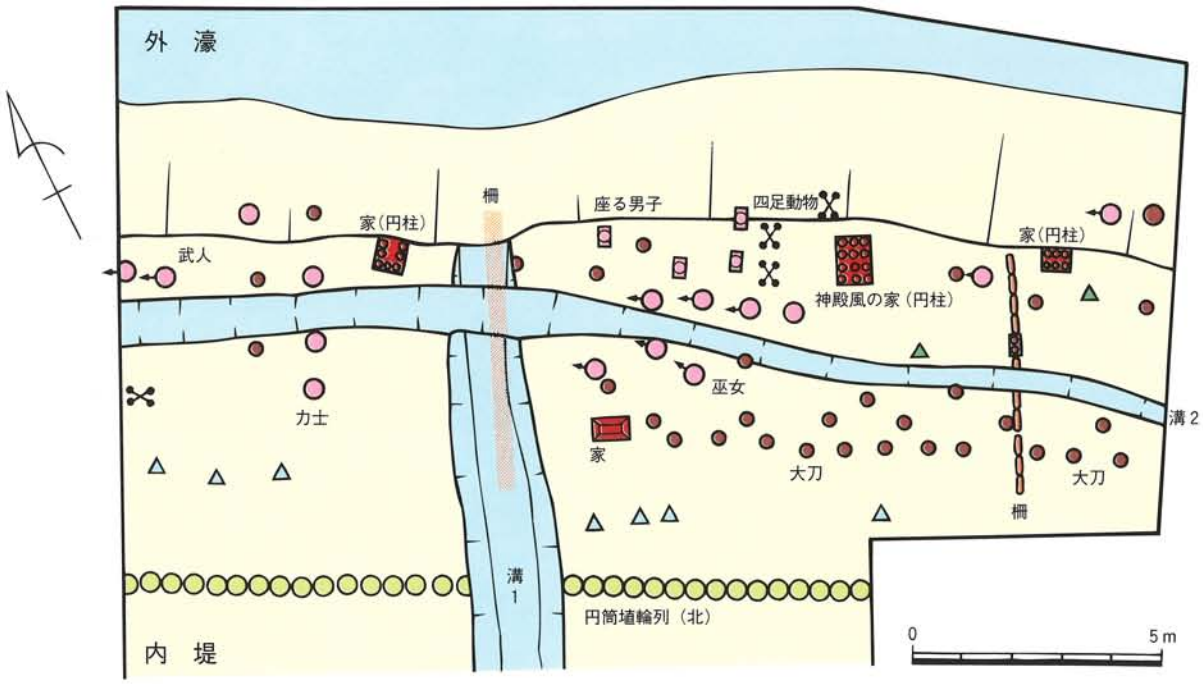
家形埴輪は位置の判明した４点のうち、３点が高床の柱を円柱で表現する珍しいものです。なかでも最大の家形埴輪は高さ170cmをはかります。高床に吹き抜け構造の壁が巡り、入母屋造りの屋根を千木や堅魚木で装飾する神殿風の建物で、祭祀区の中でもひときわ目立つ存在です。

柵形埴輪は長方形の細長い筒状となったもので、上端部には山形の切り込みが連続します。短辺を接しながら柵のように直列して南北に並び、中央付近で門形の埴輪を挟み込んでいました。約10ｍの間隔をあけて東西２ヶ所で柵形埴輪がみつかっており、祭祀区内を画していたと考えられます。

人物は数ヶ所でまとまりがみられました。このうち調査区中央部では直立する女性（巫女）や座る男子等が集中していました。巫女形の女性埴輪は両足を表現した珍しいもので、髷を結って祭衣をまとい、杯などを捧げ持っています。衣装の表現方法や持ち物などが少しずつ異なっていることから、巫女のなかでの役割や職能などの違いが反映されているのかもしれません。調査区西側では儀式用の大刀を身につけた武人や鷹匠、力士などの男子がみつかっており、中央の人物群とは異なった様相を示しています。動物のうち、水鳥形埴輪は埴輪群の南縁（墳丘側）を東西に並んでいました。鶏形埴輪は家形埴輪の近辺にみられました。なかには上を向いて首まわりの箕羽を広げ、いまにも鳴きだしそうな様子を表現したものもあります。

四足動物はいずれも脚のみがみつかりました。神殿風の家の西側では５本指を写実的に表現した脚２個体が北を向いて一列に並んでいました。

神殿風の家形埴輪（基台部）検出状況（北側から）



埴輪祭祀区　概略図

神殿風の家形埴輪　復原高約170cm

これら形象埴輪群は調査区域の東西両側に続き、さらに広範囲に及ぶことが判明しています。
これらの埴輪は北西約1.2kmの新池遺跡の埴輪窯で焼かれ、運ばれてきたものと考えられます。

外　濠

内堤北側の調査区では、近・現代の耕作土と整地土を除去するとすぐに地山（基盤層）となり、外濠の堆積土は確認できないことから、外濠は後世に削平されてしまったようです。調査区中央部では耕地の開発以前に埋没した幅７ｍ、深さ２ｍの大溝を検出しました。東西方向に延びる溝埋土の大部分は砂や礫で用水路の機能をもっていたと考えられます。埋土の上層からは11世紀中頃の瓦器椀がみつかりました。

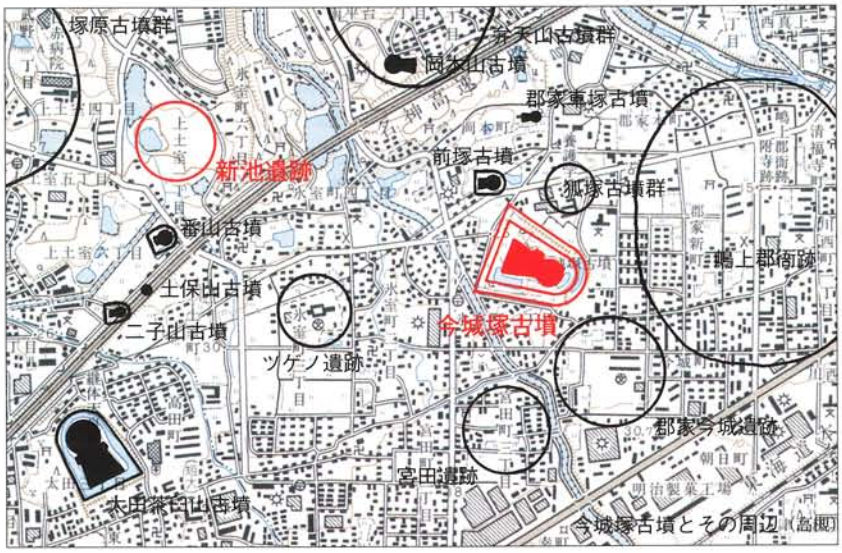
まとめ

今回の調査では今城塚古墳の北側内堤の状況についての良好な資料をはじめて得ることができました。内堤の円筒埴輪は両側縁に沿ってそれぞれ一直線に並び、両者の間に埴輪の樹立はみとめられませんでした。

形象埴輪群が分布する「張出」は、内堤の北辺をさらに北側へ突出させたものです。「張出」の表面は均質な黄灰色土で被われており、祭りの場として意図的に用いたのかもしれません。逆に内堤本体では表面にも多くの砂礫が散布し、両者には明らかな違いが認められることから、張出は埴輪祭祀区をつくるため内堤本体に付加されたのかもしれません。張出の地表面全体が傾斜しているのは、このような盛土の違いがもとで、地震などの大きな力や振動が加わったために地滑りや不同沈下をおこしたのかもしれません。

家・器財・人物・動物などの形象埴輪は、柵形埴輪によって画された範囲のなかで列状あるいは群をなしてまとまっていました。人物は、足先が埋葬主体のある墳丘（後円部）とは反対側にあたる古墳の外側を向くほか、大刀形に付属する盾も正面が外側を向くなど、外部からの視点を強く意識して配置されたことをうかがい知ることができます。これらの埴輪のまとまりは、それぞれが何らかの場面を表現しているとみられます。今回検出した形象埴輪群の範囲は東西20ｍ、南北約６ｍを測り、さらに東西両側に広がっていることが明らかになりました。これらは大王陵級の古墳で執り行われた埴輪祭祀の実態を考えるうえで、たいへん重要な資料となります。

上：人物埴輪（男子頭部）現存高約15cm
下：鶏形埴輪（頭部）現存高約35cm



史跡・今城塚古墳
ー平成13年度　第５次規模確認調査ー

所 在 地／高槻市郡家新町
史跡指定／1958年2月18日
1991年7月20日　新池埴輪製作遺跡を追加指定
指定面積／80,632㎡
アクセス／JR摂津富田駅から北へ1.5㎞、徒歩20分
または同駅から市バス奈佐原行き
「福祉センター前」下車、徒歩3分

編　集／高槻市教育委員会　文化財課
埋蔵文化財調査センター
高槻市南平台５丁目21－１
TEL 072－694－7562
発　行／2002年11月22日
印　刷／株式会社　日東印刷
TEL 072－677－3711